

夏目漱石の『それから』を精読する レジューメ

○ なぜ、代助は、働かないでぶらぶらしているのか？

P22 P34 P74 P83 P87-88 P105 P151 P168 ※ページ数は、新潮文庫による。

○ 代助と、平岡の考えの違い

P19 P23 P52 P79-81 85 87 P114 P119 P136 P202

○ 代助の父の確執は何か？ 父の説く、「誠実と熱心」になぜ反発するのか？

P31 P43 P47 P108 P121-123 P210

また、父が代助に結婚を強いる理由は？ P128 P165 P188-189 P250

○ 日糖事件と長井家の会社の関係は？ P108

○ 代助は、義理の姉、梅子をどう思っているのか？ P69 P101 P111 P218 P223

○ 代助と三千代の関係は、どこで変わったのか？

P30 P55、56 P106 P114 P120 P138-147 P170 P175 P193-199  
P235-240 P245 P256-261 P276

○ 代助の精神状態の変化 P63

『自然児になろうか、意志の人になろうか』の意味 P211 P229 P241

○ なぜ、父の縁談を断って、三千代を平岡からもらおうとするのか？

P122 P183 P213 P223

姦通罪 旧刑法（明治 40 年法律第 45 号） 第 183 条 親告罪

有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ處ス其相姦シタル者亦同シ

（夫のある女子が姦通したときは 2 年以下の懲役に処す。その女子と相姦した者も同じ刑に処する。）

前項ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ之ヲ論ス但本夫姦通ヲ縦容シタルトキハ告訴ノ效ナシ

（前項の罪は夫の告訴がなければ公訴を提起することができない。ただし、夫自ら姦通を認めていた時は、告訴は効力を有しない。）

## ★あらすじ

代助の父は実業家で、時代の波にのり、成功していた。次男の代助は学生時代から裕福な生活を送り、卒業後も一戸を構えるが就職せず、実家にもらいに行く金で、社会とは距離を置く、自由気ままな生活を続ける。

対照的に、親友である平岡は卒業後、銀行に就職し、京阪の支店に勤務し、一年後に代助と平岡との共通の友人である菅沼の妹である三千代と（三千代を愛する代助が斡旋して）結婚する。生まれた子はまもなく死亡し、三千代も心臓を悪くする。三年後、平岡は、部下の公金 500 円ほどの使い込みの累が支店長に及ぶのを避けるために（その辺の理由はおそらく平岡のウソで彼が使い込みしたらしい）辞職させられ、放蕩し、東京に戻ってきて、代助と再会し、就職斡旋を依頼する。

代助は、生活に困窮する三千代夫妻のために金を工面してやろうと兄である誠吾に借金を申込み、しかし断られ、自分が「金に不自由しないようできて、大いに不自由している男」（第四章）であることに気づく。

平岡は新聞社に就職する。代助は、三千代に会う機会を重ねて、自分が三千代を愛していることにあらためて気づく。（改正前民法の規定によれば、男が満 30 年に達しない間は、婚姻は家に在る父母の同意を得なければ成立しない。）

代助は、三千代に「ぼくの存在にはあなたが必要だ。どうしても必要だ。ぼくはそれをあなたに承知してもらいたいです。承知してください」と愛を告白し、佐川の娘との縁談を父に断る。

卒倒した三千代は病床で、あやまらなければならないことがあるので、代助のもとに行ってくれと、平岡に言う。

代助は、平岡に三千代を譲ってくれるように言う。

平岡は、三千代・代助の関係その他を代助の父に手紙で知らせる。

代助は、父からは、もう生涯会わない、どこへ行って、何をしようと当人の勝手だ、その代り、以来子としても取り扱わない、親とも思ってくれるなど告げられ、兄からももう会わないと言われ、職業をさがして来ると言って、町に飛び出す。